

ビジネス フォーカス

【スポーツエレクトロニクス】

【進化するウェアラブル機器】

心拍数などを計測するウェアラブル（身に着けられる）機器は、フィットビットに代表されるリストバンド型が主流だが、アップルウォッチのような腕時計型も普及し始めている。

多くは歩数や距離、走行スピード、心拍などを計測する。腕時計型の中には体温や脈拍、心拍などに特化した機器もある。前者が主に活動量計としての役割であるのに対し、後者はバイタルデータの収集などを目的としているところに違いがある。

このうち活動量計としてのウ

エアラブル機器市場は、さらに拡大する余地がある。背景の一つは心拍トレーニングの一般化、もう一つは計測機器から分析・アドバイスツールとしての進化である。

行政による「メタボ」という言葉の定義がランニングブームを巻き起こしたと言われる。ただ、いくら走っても痩せない人が少なくなく、成果が出る前にやめてしまう人もいる。これは心拍の状況を考慮せず、ゆつくりと走ったことが原因であるように思われる。

心拍トレーニングとは、最大心拍数に対し、どの程度の負荷で運動すれば効果的かを示したものである。脂肪燃焼が目的であれば、最大心拍数に対し70%程度の運動量であれば効果的な減量が期待できるとされる。心拍の計測精度は、胸にベルトで装着するタイプの方が高いが、腕時計型の登場によってより簡易な計測が可能となった。

ランニングはそれ自体が楽し

いランナーにとっては問題ないだろうが、往々にして「飽きずに継続する」ことが難しい。ウェアラブル機器で収集したデータを元に、利用者がどういう状態にあるのかを分析し、次にすべきことをアドバイスするといったことが、次のモチベーションへの刺激となる。機器にはこうした分析・アドバイスツールとしての進化が期待される。

プロユースのウェアラブル機器も進化している。スポーツでは「戦術・技術」「精神力」「フィジカル」が三大要素とされる。戦術・技術ではデータに基づいたゲームの組み立てが可能だが、精神力、フィジカルは気合いや根性論の世界で語られることが多い。ウェアラブル機器はこれらに対してもソリューションを提供できる。

某スポーツ用品メーカーが、「走らない」選手として世界的に有名なプロサッカー選手にウェアラブル機器を取り付けて計測したことがある。その結果、

走行距離自体はやはり少なかったが、後半になってもダッシュの衰えがなかった上、ダッシュの本数自体も前半とそれほど変化がないことが分かった。

つまり、その選手は「走らないサッカー」ではなく、「質の高いダッシュを行うサッカー」というスタイルであったことが機器によって把握できた。この会社ではこうした機器やシステムを活用したソリューションをプロだけでなく、大学や高校などにも提供しようとしている。

スポーツとエレクトロニクスは技術の進化により親和性が高くなった。特に、日本人は国民性としてスポーツでデータを重視する傾向にある。アイデア次第でヒット商品を生み出すことも可能だろう。

2020年の東京五輪に向けて、まずは日本でのスポーツエレクトロニクスの市場創出に期待したい。

（矢野経済研究所 素材産業グループ 主席研究員 相原 光一）